日本文學研究入門

高木市之助監修

# 日本文學研究入門

文學博士 高木市之助編

ミネルヴァ書房

日本文學研究入門

昭和28年9月5日印刷　昭和28年9月10日發行

著者代表　南　波　浩

京都市中京區柳馬場二條下ル
發行者　杉　田　信　夫

京都市下京區七條御所ノ内東町
印刷者　中　村　勝　治

發行所　京都市中京區柳馬場二條下ル　株式會社　ミネルヴァ書房

電話上⑤7248・振替京都8076

中村印刷・昭榮堂製本　定價 490圓 地方賣價 500圓

# はしがき

現世代の心理には――或は現代青年の心理にはといつた方が適當かも知れないが、――前世代に見られなかつた一つの動向が見られるようだ。それは、何事によらず、自分で問題を提起し、自身それに向つて究明して行こうとする意欲を持ち出したことである。これは戰爭中自分とは無關係に問題を與えられ、首に繩をつけんばかりにして引きずられて行つた事に對する強い自覺と反省の結果かと思われるが、いずれにせよまことにけつこうなことである。ところが一方に又、現世代の學問には前代のそれに見られなかつた一つの態度が見受けられるようだ。それは學問の對象を、ぐつと自分の――というか民族のというか――生活に引きつけて現實に考えようという態度だ。それは日本の社會が最近それほどしんけんに物事を、とりわけ文學を考えなくてはならなくなつたこと、逆に言つて世の中がそれほどに、のんきでいられなくなつたことの證據でしかないと思うが、とにかくこれも誠にけつこうなことだと思う。

そこでそのような現世代のために、又そのような學問の新しい態度に應じて、日本文學を研究する學問もまたその研究の方法を建て直してかかるべきだと思われ、現にそうした建て直しは、心ある學徒の間に着々と進められて來ているが、そうして私の感覺があやまつていないならば、世間の青年達もまた國文學のこう

した再建に心からの聲援を送つてくれているような氣がする。それにもかかわらずそうした若々しい日本文學研究の爲の入門のようなものがまだ見當らないのはどうしたことか。何々入門という本がこんなにもはんらんしているのに。

これがこの入門が思い立たれた機緣でもあり、編さんされた要望でもある。ただ見方によつては單に問題の提起に終つてしまつてはいないかと思われる章もあるが、各章の背後には章末に掲げた專門の研究書がそれこそ莊重に控えているし、若いそして意欲に充ちた讀者達にとつては、先にも一言したようにこれ等の諸家にくど〳〵しく說明されたり諸家からこま〴〵と學習したりするかわりにむしろはつらつと啓發されて、そこから自分自身問題を發見し、それ〴〵獨自の道を切り拓いて行こうとするところにこそ、ほんとうに讀みがいを感ずるはずだといつてはいけないであろうか。これは監修の立場から言つて讀者への辯明であるばかりでなく、執筆者各位への、このような手頃の入門書として一冊にまとめなくてはならなかつた爲に十分のスペースを提供し得なかつた事に對するおわびでもあり、又このような狹い枠の中で、よくこれだけ示唆的且つ重點的にまとめて頂いたことのお禮でもある。

一九五三年六月一二日

高木市之助

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 目次

はしがき……高木市之助……一

## 第一部　日本文學研究法

日本文學研究法……高木市之助……九

## 第二部　史的概說

### 第一章　古代

時代概觀……久松潛一……一七

神話……西郷信綱……三一

古代歌謠……高木市之助……五四

古代和歌……窪田章一郎……四三

古代物語小說……南波浩…五五
古代日記隨筆……池田龜鑑…七七

## 第二章　中　世

時代概觀……風卷景次郎…九一
中世物語小說・隨筆・日記文學……永積安明…九六
中世の和歌……谷宏…一一六
連歌……荒木良雄…一三八
謠曲狂言……里井陸郎…一四一

## 第三章　近　世

時代概觀……重友毅…一五九
近世小說……廣末保…一六二
淨瑠璃・歌舞伎……近藤忠義…一七九
俳諧……淺田善二郎…一八七

## 第四章　近　代


時代概觀……近藤忠義…二一
近代前期小說……榊原美文…二四
近代後期小說……猪野謙二…二三八
戲曲……山田肇…二六四
近代詩……吉田精一…二八一
近代の文藝評論……小田切秀雄…二九八


## 第五章　現　代


現代小說……丸山靜…三一七
大衆小說……高橋磌一…三三七


## 第三部　便　覽


參考書目解題……安永武人…三五七
日本文學年表……北山茂夫…三六七

# 第一部　日本文學研究法

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 日本文學研究法

高木市之助

今は昔、私は同じ課題によつて改造社や、日本評論社の講座をはじめ、雜誌などにも一再ならず稿を寄せた記憶を持つている。がこうして今宵何度目かに同じ日本文學研究法について書こうとしてペンを執つてみると、やはり私なりに多少の感慨を催さずにはいられない。といつてもいまさら安價な感傷に浸ろうというのではなく、このようなつかの間の時代社會の推移が私の考え方を動かして行つたあとを見て、そうしたものに強く支配される私個人の姿に驚きの眼を見はつているのである。

「人生は短く藝術は永し」という言葉がある。このような物言いには色々の意味があつて一概には言えないが、もしこの言葉を、「人生は誠に短くはかないものだのに、藝術（文學を含めて、だからこの場合、藝術の代りに、文學と切り替えても一向かまわないわけであるが）は之に反して永遠の存在である」という風に、藝術つまり文學に對して、人生に相反するような觀念的な、そして時處を超えた或る價値を與えようとする意味に解し得ると假定するならば、このような解釋こそ、私がこれから考えてみようとする研究法の對象としてはきわめて不向きなむしろ對蹠的な解釋だと言わなくてはならぬ。

だからこのような解釋に對する吟味から、私の考察は出發するのを便利とする。一體このような考え方の中には文學に對する或る誠に浪漫的な神祕觀が潜入している。吾々がもし文學に深い關心を持ち、これを眞に科學的に究明して行こうとするならば、吾々は先ず以つて何よりも文學をこのような神聖な祭壇から人間の世界へ引き下ろして見なくてはならない。

一體文學とは人生の彼岸に立つてその永遠性を誇る、おぼろ月夜の影法師みたいな存在ではなくて、丁度その反對に人間が彼自身のために描いた、永遠どころか誠に有限なその代りには誠に現實的な自我像でしかない。文學にもしほんとうに吾々人間を鼓舞する何ものかがあるとすれば、それは文學が神に屬する永遠の存在である代りに却つて、人間に屬するこの有限性、現實性の持ち主であるという事自身に歸因するにちがいない。

文學（藝術）に永遠性を考えようとする考え方の誤謬は、文學を時代から斷ち切る事にあるであろう。永遠の理念には時代も空間もあり得ない。時代的にも空間的にも擴がりがないところ、或は逆に無際限にひろがつてしまつたところに人はどのような歴史的乃至社會的な關聯を考え得るであろうか。そしてそのように歴史的乃至社會的な一切の關聯を斷ち切られた文學の亡靈が吾々の文化をして、この實人生實生活の榮養となり眞に質量のある吾々の實體を成長させる事が出來ようなどとはどうしても考え得られないところであろう。

次に又このような謂わば歴史的な文學研究法は或る天才論的な文學研究法と對立する。「或る」と言つた

のは一般的に天才論を考えているのではない事を言うためで、極めて重大な限定である。實際、天才論がもしそのような天才の生れる環境や歴史を科學的に追究し、そこに客觀的な必然として「天才」を捉えようとするものであるならば、歴史的な文學研究法はそれと對立するどころか、却つて大きくそれに援けられなくてはならない。しかし、私が今對立すると言つたのはもつと特殊な「或る」天才論なのである。それは天才というものはそうした一切の環境や歴史から斷ち切られた、というかそうした一切を無視し拒否するというか、前述の永遠性という言葉につながつて言えば、絶對性とでも言いたい性格をしよつていると考えようとする天才論なのである。

例えば人麿、式部、芭蕉、近松などという作家はそれぞれ日本の民族が生んだ偉大な天才であつて吾々は彼等のこのような天才から大きな恩惠を受けていることにまちがいはなく、こうした天才の出現は今後も大きく期待要望されなくてはならないし、隨つて天才を對象とする文學研究も亦必須不可缺である。しかしその事は人麿乃至近松の天才に或る絶對性を認め、文學史をして、そのような暴君達が歴史や民族をふみにじつて我がものがおに行進する大行列の姿を描かしめることであつてはならない。むしろ逆に彼等がどんなに時代や社會を負うているか、時代的社會的な何ものが此の天才を生み落したかという相對的關連こそがこのような天才研究の正しい方法でなくてはならぬ。

例えば紫式部にしても安藤年山が理解したような絶對的天才論では王朝社會も何もあつたものではないが、彼女を下層貴族に位置づける事によつてのみ天才論は吾々の科學的研究法のよき支持者となるであろう。近

松にしても彼の人形淨るりの發祥の地は西の宮の〝ゑびすかき〟であり、〝ゑびすかき〟の庶民意識をうけついだのが近松であるという解釋なしに彼の天才を識する方法はなさそうである。

最後に、このような謂わば歴史的な文學研究法は歴史的な歴史研究法と必ずしも重なりあうとは限らない。文學研究法は歴史研究法ではあり得ないからである。此の問題をもつと詳しく言えば、次のようなものであろう。文學研究法が歴史的でなくてはならない事は前述の通りであるが、文學研究法が歴史研究法であつてはならない事もまたこれから考えてみる通りであろう。即ち文學が文學であるための必須不可缺な條件はそこに一つの文學的形成を必要とするという事であろう。例えば前記人麿の場合彼が果して英雄時代の殘照であるかどうかという課題を歴史家は自分の歴史的方法によつて解釋しようとする。これに對して文學研究者は又、彼等に獨自の文學研究法を使用する。これはあまりにも當然といえば當然であるが、それは歴史學界に於ては必ずしも支持を得ていない。この點について最後の言辭を弄する事が許されるなら、文學はそれがどんなに思想的な高さを持つているにしても、唯それだけでは文學になり得ない。そうした思想を文學にまで形成するものは構想力でなくてはならず、構想力によつて構想するものは、形成の「形」でなくてはならない、「形」のないところに吾々は如何なる文學も認める事は出來ない。とすれば文學研究法は「形」を置きざりにすることは出來ない。人麿の高市皇子尊の挽歌にしても、歴史家がその歴史的立場からそこにどのように英雄時代の殘照を否定するにしても、文學研究法は別に「形」の檢討による他の發言權を持つであろう。ただしかしこの場合、文學研究法が特に反省警戒しなくてはならない事は、そこに檢討される「形」を概念

や理念へ轉落させない事であろう。「形」が眞に「形」であるための絶對條件はそれが歴史を忘れてはならない事であり、歴史はこの場合、歴史家が考えている歴史と全く同一の存在でなくてはならない事である。歴史的な文學研究法と同じ歴史研究法がどんなに大きく分裂しようとも、この歴史が一つの存在としてアイデンティファイされる限り、吾々は決して分裂を憂えるには及ばない。分裂はこの意味に於てやがて辨證法的に統一されるであろうから。

以上私が考えた事はあまりにも原理原則的であつたかもしれない。しかしながらそれは第二部の諸論考が一々具體化現實化していることを私はやがて讀者と共に確認することが出來よう。（五三・六・二四）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com